

子どもをどうやって育てていったらいいのか——現代に生きる私たち親は、この問題について、簡単にはすっきりした答えを出せないでいます。さまざまな価値観があり、それぞれが相容れないからです。一方では、「才能の伸ばし方」とか「能力の早期開発」といった情報があふれており、もう一方では、「子どもの早期教育は、百害あって一利なし」と主張する児童心理学者がいます。どちらが正しいのでしょうか？

あとあと悪い影響が出てこないやり方で、子どもたちの発達を開花させてあげるには、親はどうしたらいいのでしょうか。驚くような速さで変化していく社会の中で、子どもが生きぬく技術を身につけられるよう手助けしていくにはどうしたらいいのでしょうか。

こうした問いかけを持って、私は子どもや子育ての探求を始めました。その成果がこの本です。

一九八〇年にシュタイナー教育について学び始めたとき、私は若い母親で、家庭はうまくまわっていたとはいえない状態でした。ですから、ルドルフ・シュタイナーによる子育ての洞察を知り、それをすぐさま自分の家庭に生かすことができると知ったとき、とても安心しました。そして、自分が発見したことを他の人にも伝えたいと思いました。

私はこの本の初版を一九八九年に書き上げました。それは、シュタイナーの洞察を、自分自身の価値観にじっくりくる子育て方法を探す私のような親たちと、結びつけようとするものでした。

初版を書いたあと、私はミシガン州ディアボーンで仲間たちと「バース（誕生）センター」を立ち上げ、助産師の仕事に戻りました。そこで私たちは九年以上にわたって、四十三か国から来たさまざまな親たちを助けました。その後、私は老年学と組織変動について修士課程で学びました。その間、実母と義母を六年間にわたって介護しました。

二〇〇八年に私は、再び子育てと幼児教育の世界に戻りました。娘のフェイスと一緒に、コロラド州ボルダーで「レインボーブリッジ・ライフウェイズ・プログラム」を始めたのです。

この本の改訂にあたって、私は再び、一歳から五歳までの子どもやその親の世界に浸りました。そして、現代の親たちは、私が小さい子どもを育てていたときと比べて、もっとよるべない状態にあることを知りました。時がたつ中で、幼い子どもたちに対して逆行するような力は強まるばかりだったのです。具体的には、幼児期に知的な学習を強制したり、自律的に行われるはずの遊びが損なわれたり、母親へのサポートが欠け、その孤立が深くなっていたり、子どもの肥満問題がひどくなったり、幼い子どもが電子機器にますます浸るようになっていたり、といった問題です。

ただ、その一方で、よい方向へ向かうための情報やサポートを探すことは簡単になってきています。初版が出て以来、米国ではシュタイナー学校や、シュタイナー的な幼児教育のセンターやプログラム、書籍、オンライン販売、ブログなどがたくさん存在していて、私は勇気づけられてもいます。

他のたくさんの人たちと同じく、私も、「子育ての知恵をもっと早く知っていたら」と思っています。

した。新米の親たちに対して、私はいつもこう言います。

「私も、本に書かれている間違いを全部やってきたのよ。だからこの本を書いたの！」

助産師だった頃、私は自分を、自然な出産の守護者と思うようになりました。惜しみなくサポートは提供するけれども、手をさしのべるのは必要なときだけ、という守護者です。それは女性と、女性の「産む」という力を基本的に信頼し、リスベクトしているからです。今の私は自分を、「自然な子ども時代」の守護者だと思っています。子育てに関する新しいコモンセンスに基づいて語り、子どもが子どもとして存在することを助け、「最初の先生」としての親の大切な役割を認識できるように手助けする存在であると。

個人的なことをお話すれば、子どもが成人したことの子期していなかった喜びの一つは、彼ら自身から、私の子育てへのフィードバックがもらえることです。彼らにとって何が効果的で、何がそうでなかったかについて、彼ら自身の言葉で語ってくれるわけです。そのように過去を振り返り、自分たちがたどってきた道を考えてみたとき、私はシュタイナーの洞察に出会えたことを改めてありがたく思います。

子育てについての「もう一つ別の権威や規則」は必要ない、と私は思います。シュタイナー自身には子どもがいなかったことも、皆さんに思い出してほしいと思います。ただ、私たちには、人間というものを理解する新しい方法が必要です。

もしも人間というものを、「からだ、知性、感情、そして魂や精神性（スピリット）」という、すべてを包み込む全体性においてつかみ取り、子どもの発達についての理解を深めることができるなら、私たちは、自分自身の直観や価値観に基づいて、自分の選ぶ道を判断できるようになれると思

うのです。

私たち親の役割は、子どもの成長を理解し、その新しい知識から、子どもについての直観を強めることです。それを通して私たちは、毎日自分が行うシンプルな行動に「意味」を見いだすことができるようになるでしょう。ありふれた日常の中に、聖なる価値を感じ取れるようになるのです。

子どもを育てる、という道の上で、この本があなたの役に立つガイドになりますように。そして、あなたと、あなたの成長する家族たちに、祝福がありますように！

二〇一二年

コロラド州ボルダーにて

ラヒマ・ボールドウィン・ダンシー



新版 親だからできる
赤ちゃんからの
シュタイナー教育

もくじ

第1章

あなたが子どもの最初の先生

はじめに——新版によせて 3

かけがえのないとき 14

混乱する価値観と、今の親たちのジレンマ 15

知的な発達を偏重する文化の中で 16

変わる家族のかたち 17

はやく大きくなーれ？ 18

子どもは小さな大人ではありません 21

スピリチュアルな存在としての子ども 23

最初の七年間に子どもはどのように学ぶのか 25

親としての大切な仕事 27

第2章

新しい命の誕生——新生児のケア

誕生のときに起きること 34

愛と絆の最初のめばえ 36

新生児は「全身が感覚器官」 38

◆「ふれる」という感覚 39

◆「聞く」という感覚 41

◆話しかけよう、うたってあげよう 42

赤ちゃんと共に生きることの意味 44

第3章

最初の一年間——赤ちゃんの発達を助ける

赤ちゃんがはいはいを始めたら 48

「泣いたら抱っこ」が信頼の基礎 49

生活にリズムをつくることの大切さ 51

泣きやまない赤ちゃんには 54

「おしゃべり」と「歩くこと」のつながり 56

子どもの魂の、夢見るような深みで 58

第4章

バランスのとれた成長とは——幼児の発達を助ける

二歳までの大切なこと 62

幼児教室をどう考える？ 63

「いや！」——ただこねにどう対応するか 65

◆一貫した態度をとる 66

◆決まったやり方をつくる 67

◆別の場所につれていく 68

物が語る「沈黙の言葉」をさえぎらないように 70

幼い子どもにとっての豊かな環境とは 73

第5章

「家庭での暮らし」がすべての基盤

意識と愛情をこめて「家」をつくる 78

「四つの側面」から、今の家を見直してみる 79

◆物理的な家 80

◆リズムとしての家 81

◆関係性としての家 82

◆スピリチュアルな家 83

暮らしにリズムをつくり出す 85

◆なぜリズムが必要か 86

◆できることから始めましょう 88

◆食事 89

◆栄養よりも大切なこと 93

◆おやすみの時間 95

◆朝——目覚めるとき 97

◆子どもに毎日の仕事を 98

一年のリズム 100

季節のお祭り 102

誕生日 104

第6章

しつけや、その他の子育ての問題

しつけの問題 106

叱らずにうまくやっていく方法 107

◆模倣させ、例を見せて教える 109

◆結果を期待しないこと 110

◆「だめ!」と言うときは 112

否定的な行動にはどう対応するか 114

親自身の感情 115

親の生命エネルギーが子どもを育てる 117

母親が仕事を持つことについて 119

父親と母親の役割に違いはあるか? 121

子どもは一人ひとり、なぜこんなにも違うのか 123

◆胆汁質 124

◆粘液質 125

◆多血質 125

◆憂鬱質 126

「子離れ」の不安 127

育児ノイローゼにならないために 129

第7章

創造的な遊びと想像力

ごっこ遊び——想像力と模倣から生まれる遊び 134

遊びを通して世界を体験する 135

◆空間、時間、そして宇宙 136

◆自然の世界に出会う 137

◆暮らしの中で遊ぶ 138

◆人形の特別な役割 139

自由な遊びは子どもの成長の糧 142

創造的な遊びのための方法 145

◆楽しそうな環境をつくる 145

◆創造的な遊びのためのおもちゃ 147

◆外遊び 148

第8章

子どもの想像力を育てる

想像力はなぜ大切か 152

◆「聞く」と「見る」ことの違い 154

お話をすることの意味 156

おとぎ話の持つ内的な意味 158

◆おとぎ話の中の残酷さや悪をどう考えるか 161

◆幼い子どもとおとぎ話を楽しむ 163

「治癒的な物語」 165

人形劇の持つ治癒的な力 166

第9章

子どもと芸術的な力

色は魂を育てる 170

にじみ絵を子どもと楽しむ 172

◆用意するもの——絵の具と紙と筆 173

◆その他に必要なもの 174

◆描き始める準備 174

◆さあ、始めましょう 176

◆子どもにとってのにじみ絵の経験 177

◆経験のメタモルフオーシス 179

ブロッククレヨンを使う 180

蜜ろうを使って遊ぶ 182

子どもたちと一緒にクラフトをする 183

第10章

子どもと音楽の喜び

楽しい音をつくる 186

子どもと一緒にうたう 187

ペンタトニック音階が心呼び起こすもの

ピアノ教室やダンス教室に通うこと 191

第11章

知的な発達と幼児教育をめぐる

幼児向け教育プログラムで注意すべきこと

196

シュタイナー幼稚園のプログラム

198

◆創造的遊び

198

◆お話の時間

199

◆おやつ時間

200

◆芸術的な活動

200

◆ゲームのサークル

201

◆外遊び

201

◆やさらかで美しい環境

202

◆教師の役割

203

家庭におけるシュタイナー幼児教育

207

第12章

やってみようと思う親のためのQ&A

Q：子どもも「現代」に適應した方がいいのでは？

212

Q：子どもが時代遅れになりませんか？

214

Q：もうすでに知的に早熟になってしまった子は？

216

Q：テレビはどうしていけないのですか？

218

Q：電子ゲームにも良いところがあるのではないですか？

222

Q：子どもも納得する創造的なおもちゃへの切り替え方がありますか？

224

Q：離婚が子どもに及ぼす影響は？

227

Q：死をどう教えたらいいいのでしょうか？

230

Q：「こわがり」の子どもにはどうしたらいいのでしょうか？

232

Q：子どもが病気のときの親の役割は？

234

Q：子どもにはどんな宗教教育がふさわしいのでしょうか？

236

Q：意識的な子育ての助けになるものは？

241

おわりに

244

資料・シュタイナー教育に関する情報など

246

註

251

訳者あとがき

252



かけがえのないとき

誕生から六歳までの間は、とてつもない成長と学習が行われるときです。子どもが家庭で学ぶことは、その後の人生にとってかけがえのない基礎となります。

バートン・ホワイトという教育心理学者は、何千という幼児用教育プログラムを調査した結果、子どもの全体的な教育にとって、最も大切なのは家庭での教育だ、と結論しました。家庭での教育がうまくいっていなかったら、その後の教育でそれをカバーするのはきわめて難しい、というのです。^{★1}

ホワイトはさらに、何が子どもを「すばらしい」人間、つまり、知的にすぐれているだけでなく、バランスがとれていて、一緒にいると楽しくなるような人間に成長させるのか、ということテーマに研究を続けました。彼は実際の家庭に入り込み、そこで子どもがどう扱われるか、そしてその結果はどうか、ということを調査したのです。

ホワイトが発見したことは、子どもの全体的な成長という点では、最初の六か月から八か月までは、大体うまく育てられているということでした。特別なハンディキャップなどがないかぎり、最初の八か月の間は、測定できるような違いがなかったのです。けれども、その後の、八か月から三歳までの間は、人間の発達にとってかけがえのない重要なときだということも同時に発見しました。そして、この時期に子どもの十分な発達が可能となるような環境を整えている家庭は、アメリカで一〇パーセントに満たないのではないかと感じたそうです。^{★2}

ホワイトはまた、「楽しそうな、甘やかされていない三歳児を育てることは、利発な三歳児を育てることよりずっと難しい」とも述べています。^{★3} ホワイトはこの調査に基づいて、知的な発達だけで



はない、子どもの全体的な発達を支えていけるようなプログラムを開発しました。[★]

ルドルフ・シュタイナーも、幼い時期の大切さを認識していました。シュタイナーは、幼いときに行われたことは、後の人生に大きな影響を与えると述べました。

混乱する価値観と、今の親たちのジレンマ

この大切な幼児期。だからこそ、親は誰でも、子どものために最も良いことをしてあげたいと思います。けれども、何が最良のことなのでしょう。——八か月の赤ちゃんにもっといろいろなことをしてやりたいと思う親は多いでしょう。けれども何をすればいいのでしょうか。

私たちは、子どもを育てるにあたって、たくさん疑問や迷い、罪恶感を持っています。それは、私たちが非常に速さで変化している時代に生きているせいです。

私たちの文化はもう、「子どもがどう育つべきなのか」ということについて、一貫した確かな価値観を与えてくれません。さらに、かつては両親やその他の親族が、子育ての伝統的な知恵や助けや継続性を与えてくれましたが、私たちの多くは、現在そういった親族とは離れて生活しています。

そして、私たちの親の世代くらいからのことですが、「母親であるという芸術」は、「育児の科学」によって置き換えられていきました。けれども、自分たちの親が「科学的な育児法」に従がって、厳格に四時間おきに授乳したり、子どもを「泣かせ続け」たりしていたことに疑問を持つ人たちもたくさんいます。

赤ちゃんがはいはいを始めたら

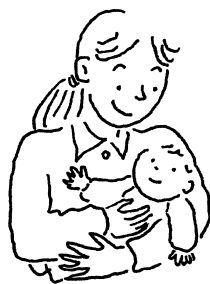
親の目から見ると、子どもは、こんなふうに大きくなるように見えます。最初はすべてがうまくいくように見え、それからかなり難しいときがあり、それからまたうまくいき、というような感じ*₁です。

ジョセフ・チルトン・ピアスは、『マジカル・チャイルド育児法』という本の中でこう述べています。子どもはそれぞれの発達段階において、まず安全な「母親的なもの」の中に入り込み、その後そこから、新しい経験や能力を求めようとして世界へ漕ぎ出す、というのです*₁。

この収縮と拡大は、呼吸のようなものです。そして、発達という過程にとつては、母親的なものへの回帰（内側へ向かうこと、あるいは甘えること）は「後退」ではなく、独立に向かおうとする、新しい段階への準備なのだ、と理解することが大切です。

この「回帰」は、しばしば、赤ちゃんがはいはいを始める直前に起こります。あなたは、重たくなった赤ちゃんを抱き続けるはめになり、「こういう状態に終わりはあるのかしら」と思うかもしれません。やがて、突然それが終わり、赤ちゃんは「はいはい」という、自分で動き回る最初の手段を手に入れて、あなたの元を離れるようになるのです。この時点で育児はがらっと変わります。というのも、突然赤ちゃんは、あらゆるものごとに関わりだすからです。

赤ちゃんがはいはいを始める前に、家中を点検して、赤ちゃんに対しても、そして赤ちゃんからも、物が安全であるよう準備することが必要でしょう。子どもがうまく育っている家庭を観察したホワイトは、そういう家庭では赤ちゃんをベビーサークルなどに入れて閉じ込めたりせず、家を安全にした上で自由に動き回らせていることを発見しました*₂。赤ちゃんははいはいし、さまざまな刺



激を楽しみ、あなたを追いかけていのですから、そうさせてあげましょう。

「泣いたら抱っこ」が信頼の基礎

赤ちゃんの幸せは、愛や温かさや食べ物への要求が満たされることにかかっています。感情面での発達的基础は、家庭という最初の関係の中で、愛や信頼にふれることで築かれます。泣いたらすぐに応じてあげること、赤ちゃんは、この世界は良い所で、自分はあなたの愛と保護に包まれているのだ、ということをおぼえてほしい。

自分の本能に従う母親はこのことを知っています。それに、心理学者たちが、「どうしても赤ちゃんを甘やかすことにはならない」と言っていることを知れば、もっと自信を持てるに違いありません。けれども残念なことには、今でも母親は、祖父母や、ときにはパートナーからさえ、赤ちゃんを甘やかしている、と言われることがよくあります。「赤ちゃんは泣かせた方がいい」と言われることまであります。

研究者によると、四か月から五か月までの赤ちゃんは、不快なときだけに泣くのだそうです。その後ではじめて、新しい、意図的な行動が現れてきます。大人を呼び、抱っこしてもらうために泣くという行動です。赤ちゃんが、自分が呼べば大人と楽しいことがやってくる、という信頼を持っていることは大切なことです（不適切な施設にいる赤ちゃんが、泣いても対応してもらえないことを学ぶと、抱っこを求めて泣くことがなくなる、ということをおぼえてください）。ほとんどの専門家は、赤ちゃんがあまり泣かない状態であるより、関心を求めて泣きすぎる方が健全だとしてい

二歳までの大切なこと



一歳から二歳の間、子どもはからだの使い方を覚え、言葉の力を発達させます。言葉の発達に伴って、子どもは、問題を解決するときに、実際に動くよりむしろアイデアやイメージを使うようになります。思考と記憶のこの成長は、子どもの行動と相互に関わり合います。そして二歳の子どもは、かなり複雑な社会的存在になります。

一歳から二歳の間、親が最初の先生として行う大切なつとめは、バランスのとれた発達を助けることです。まずは、新しい運動能力を練習する、身体的な発達。そして、母親、父親などの世話をしてくれる人との関係を中心とする、感情的な発達。最後に、自分のまわりの世界を探索することを通して行われる、知的な発達。

子どもの自然な好奇心は、安全な環境で、制限のない状態で自然に開花できればそれが一番です。子どもは時間の多くを、物を探索し、ばらばらにしたり、積み重ねたり打ち倒したり、といった技術をマスターすることに費やします。ちようつがいのあるドア、階段、窓から外を見るため椅子に登ること、そういったことが子どもは大好きです。トイレの便器はこの他好きなので、トイレには近づかせないように注意しましょう。家の外には探索する物がとてたくさんありますから、外遊びもたっぷりさせましょう。子どもはぶらんこや砂遊びが大好きです。

子どもが探索するものは、みんな口に持っていきますし、飲み込めるものはすべて飲み込みますので、害になるものは、鍵をかけた入れ物の中にしまうように気をつけましょう。なぜ、ガソリンやら洗剤やらを飲むのだろう、とお思いでしょうが、子どもの好奇心は、悪い味やにおいより大きいものなのです。

社会的発達の面では、一歳の子どもが持つ対人関係は、親との関係に集中しています。親から長い間離れることはありません。子どもが必要とするときだけ親がそばにいてやり、必要としないときは放っておくことで、子どもは「独立」と「安全」の両方を教わります。そして子どもが何かを発見して持ってきたときに、それについて一緒に喜んだり驚いたりすることは、あなたが好奇心と学習の両方を大事にしているということを子どもに伝えます。

子ども同士の関係はどうかといいますと、二歳の子ども同士が互いに肯定的な関係を結ぶことはあまりありません。一緒に遊ぶという社会的技術が、この年代の子どもにはないのです。この年代で遊び友達をつくることは、むしろお母さんの方に役に立ちます。つまり、他のお母さんとの関係ができるからです。子どもたちの方は、しっかりと見守られていないとうまく遊べません。遊びは、一緒にというよりむしろ、それぞれが隣同士で遊んでいる、というものになります。

幼児教室をどう考える？

子どもたちに最良の機会を与えてあげたい、という自然な気持ちから、多くの親が一歳半の子どもを、水泳や、字の勉強や、体操選手になるための教室に通わせようと思います。そういった教室は親には人気がありますが、いやな思いをする子どもも多いのです。自分自身を信頼して、いいと思えないことについてはしないようにしましょう。

幼い子どもにとって、良い発達のためには教室が必要ということはありません。何かの教室なりグループなりに通わせるなら、必ず子どもと一緒にいるようにして、子どもの年齢にふさわしい内